

② 社会教育と生涯学習

西村英彦

一 はじめに

ヒトが生まれてから老いるまで、人間らしく生活して行くために必要な知識や技術を学んだり、暮らしの中で知的な好奇心を満たし、趣味を楽しみながら心豊かに暮らす、そういう考えの人がたくさんいて、同じ（または似た）価値観の人々との出会いを大切にしながら文化馥郁（ふくいく）たる町をつくって行く。このような社会を生涯学習社会というのだろう。

市民生活の中にこのような生涯学習意識を育て、生涯学習社会づくりを助ける社会教育主事を務めるようになって十九年経った。

昭和四十四年十月、分区と機構改革が同時に行われ、十四区に社会教育係が設置された。その翌年には社会教育を行うものに専門的、技術的な助言と指導を与える職員として、社会教育主事（一般職と併任）が設置された。いずれも横浜市における社会教育の振興をはかるために

とられた措置である（昭和五十九年 区における社会教育の概要「横浜市教育委員会・横浜社会教育主事会」）。

最初、勤務の合間約二カ月にわたって行われた初任者研修（表一）に参加しながら、学級・講座の開設などの事務事業を処理したが、区役所の中も市民も社会教育というものに馴染みが薄く、自分の職務内容を懸命に説明しながら職責を果たすことに務めた。この研修の内容は、私の好奇心を満たし、その後の職業生活に必要な知識や技術を学ぶことを教え、仕事に行き悩んだとき学習によって解決して行くことを覚えさせた。手探りで始めた社会教育事務事業も、分区直後の旺盛な区民意識と、市民にとって物理的にも精神的にも身近になった区役所が、税務行政や、戸籍事務の外にサービス行政を提供してくれるようになったことに対する反応に励まされて、研修と実験・研究を兼ねた実務の回復で社会教育主事を務めて来た。

一 はじめに

- 一 港南区における社会教育行政
- 二 暮らしの中にある学習エネルギー
- 三 生涯学習社会を作る人たち
- 四 生涯学習社会の生涯学習
- 五 社会教育主事の生涯学習
- 六 社会教育と生涯学習

二 港南区における社会教育行政

区における社会教育行政の役割は、社会教育を行う人々のための条件整備者である。大別すると、

- ① 生涯の各時期に起こって来る生活課題解決や学習要求を満たすために、自発的にかつ主体的に学習する意欲を創り育てて行くこと。
- ② 啓発されて生まれた学習意欲を、効率の良い学習活動として育てて行くために、求めに応じて学習集団の運営、学び方の指導・助言などと、経費の補助など必要な援助を行うこと。

③ 集団学習の最初の成功体験を大切につくり、継続学習への意欲に育てて行くこと。などである。

具体的な事務事業は、市民の属性、発達段階や学習領域を考えて、次の五分野に分けて執行している。

表一 社会教育主事としての研修機会

名称・主催者	内容	時期・期間	場所
初任者研修 (市教委)	教育原理、社会教育概論、社会教育史、社会教育行政 社会教育方法論、教育社会学、社会心理学、家庭教育 成人指導及び青少年指導、社会教育演習	昭和45年度 2カ月	婦人コーナー外
社会教育主事 研修 (市教委)	社会教育主事の職責を遂行するための研究と修業 ケース研究を主に研修し、宿泊研修もあった	昭和45年度 ～63年度 年12回	社会教育コーナー外
青少年教育 行政指導者 研修 (県)	発達心理学、比較心理学、青少年理解 青少年教育技術演習 青少年教育理論と演習	昭和46年度 ～54年度 4回 延べ14日	藤沢青少年会館外
関東甲信越放 送利用社会教 育研究会 (1都9県教 育委員会、 NHK外)	「放送を学習にどう生かすか」 事例発表と研究討論 記念講演	昭和47年度 ～63年度 毎年各2日	1都9県持ち回り
レクリエー ション講習会 (市教委外)	レクリエーションの理論と実技	昭和47年度 2日	城ヶ島ユースホテル
中堅社会教育 主事研修 (県教委)	話し合い学習の理論と演習	昭和48年度 3日	県職員会館
社会教育主事 講習 (文部省)	教育原理、社会教育概論、社会教育史、社会教育行政 社会教育方法論、教育社会学、社会心理学、家庭教育 成人指導及び青少年指導、教育調査、社会教育演習 体育・レクリエーション指導	昭和49年度 2カ月	東京教育大学外
社会教育学会 (日本社会教 育学会)	社会教育学研究 研究発表と討論	昭和57年度	中央大学
川崎・横浜・ 横須賀社会教 育放送利用研 究協議会 (同上)	放送を利用した社会教育の情報交換 放送を利用した実験学級による教育技術研究 テレビセミナーの開設 放送を利用した社会教育を発展・充実させるための共 同研究(社会教育行政・学習者・放送事業者)	昭和60年度 ～63年度 毎月1回	川崎・横浜・横須賀 3市持ち回り
社会教育主事 研修専門コー ス (国立社会教 育研修所)	社会教育計画の企画・立案・展開・評価に関する専門 的な知識・技術	昭和61年度 1カ月	国立社会教育研修所
社会教育海外 研修 (全国社会教 育委員連合)	ヨーロッパ4カ国の社会教育事情視察と研究 国際化時代の学習課題発見 異文化体験	昭和62年度 2週間	イギリス、イタリア、 スイス、フランス外

- ① 青少年の社会教育(青少年教育)
 - ② 成人の社会教育(成人教育)
 - ③ 社会体育
 - ④ 社会教育施設の管理運営
 - ⑤ 市民文化の振興
- また、これを発達段階別に分けてみると、
乳幼児期

ヒトの生涯の最初に体験する教育・学習の場である家庭の教育機能を充実するために、両親たちに家庭教育の学習機会を提供している。具体的な施策として家庭教育学級の開設や、母親クラブの育成事業が上げられる(本誌第九一号母親のネットワーク作りへ向けて参照)。

これらの事業のねらいは、

ア 核家族化の進行により衰退してしまった、かつて家庭が持っていたいたしつけなどの教育機能を回復し、若い母親たちが自信を持って育児に当たれるような教育力を育てて行く。

イ 学習に参加した母親たちの輪を広げ、生涯学習の意識や行動を広げて行くと共に、家庭の中では夫(父親)にも家庭教育の共同責任者としての意識を強めて行く。

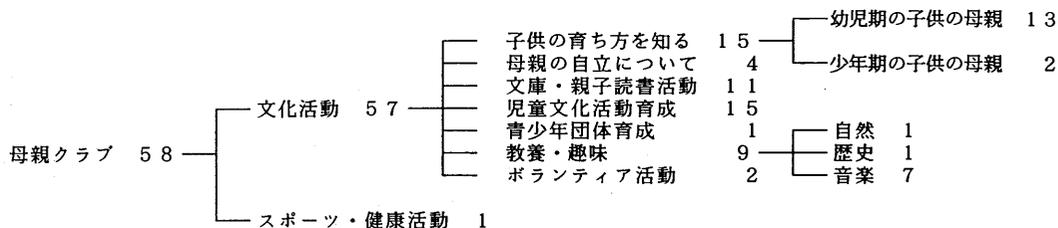
ウ 学校教育における最後の学習参加体験から、これらの学習参加までのブランクを少しでも少なくする。

などであるが、若い母親たちの集団学習参加の阻害要件を取り除き、また、参加した母親たちの学習効果を高めるために、幼児の保育(託児)を行っている。このために、熟練した保育ボランティアをお願いし、消極的な託児から更に進んだ幼児教育も行っている。幼児たちには、集団で受ける最初の生涯学習体験である。

母親クラブは最も小規模で身近な、母親の教育力を育てる学習集団として奨励している。

予算で八千円の補助金を交付し、運営について指導・助言する外は活動体験を交流する研究会を開くだけであるが、母親たちの学習参加の動機づけには有効な施策である。この補助金は、団体の運営費として交付されるという社会教育行政では珍しい補助金である。

図-1 昭和63年度母親クラブ活動目的別分類表（補助金交付対象のみ）



港南区には母親クラブ活動から育った文庫が四十五（本誌第八八号「大多良文庫参照」、お母さんの人形劇団が九、ママさんコーラス七、子育て学習グループは十九もあり、中には子育て真っ盛りの若いお母さんたちの学習を助けるための、保育ボランティアを引き受けている先輩お母さんたちの母親クラブ活動もある。彼女たちが自ら育てた教育力は、そのまま地域社会の教育力となって、生涯学習社会形成の貴重なダイナミズムとなっている。

写真-1 家庭教育学級で学ぶ若い母親たち



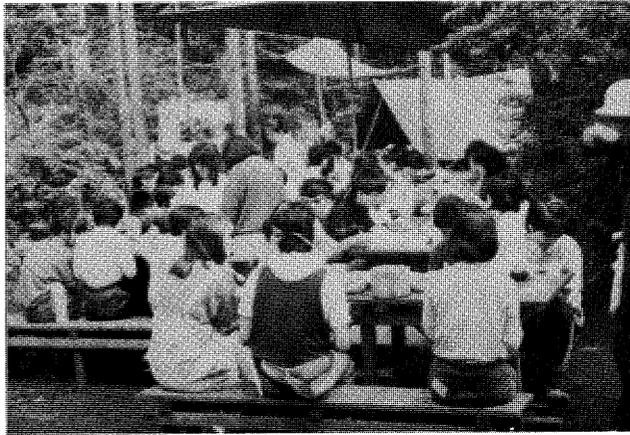
② 少年前期（児童期）
区内のほとんどの地域に（自治会・町内会単位に）子供会活動があり、外にボーイスカウト・ガールスカウトなどの青少年団体が活動している。
子供会は、青少年教育の基礎集団として地域の大人たちが自発的に、主体的にその育成に当たっているので、行政は、彼等の主体性を損ねないよう配慮しながら、学習のための条件整備を援助するようにしている。

写真-2 母親たちが学ぶ間、保育を受ける幼児たち



③ 少年後期（中・高校生期）
このころになると子供たちも自主性を高め、今までの水平輪切り集団からタテ型社会を目指すようになる。昭和四十六年、中学生以上の青少年の社会教育集団として港南区ジュニアクラブ
この外に直接子供たちを対象に児童文化教室や、子供オーケストラ教室、子供演劇教室を開いたり、親子ハイキング、親子キャンプなどの親子参加事業をたくさん実施して、子供たちが学校以外の場で学習する機会を提供している。

写真-3 キャンプするジュニアクラブの若者たち



プの活動が生まれた。彼等は自ら育つ力を持っている。そのグループワークを助け、活動計画作りの指導・助言をして励ましている。

また、このような集団にも、リーダーは必要なのでリーダーのための学習機会を提供したり、メンバーシップやリーダーシップを学ぶためのキャンプ、合宿、ユースホステリングなどの引率をしたり経費を補助もしている。国立校、私立校の生徒たちも入り交じって、同じ屋根の下に寝て、同じ釜の飯を食った体験は、受験や

図-2 港南区ジュニアクラブの会報

四季

発行日 88年9月11日
発行責任者 港南区ジュニアクラブ
NO. 22

始めに... 会長 石川由美

私が初めてジュニアクラブを知ってから早くも5年がたとうとしています。時がたつのは早いもので、私ももう高2。きっと今年が私のジュニア生活の最後の年なのでしょう。中1になった春、不安と共にふらふら期待をしながら参加した春の一日研、あの頃、私にとってのジュニアは、あがれ、そのものでした。あの時の高校生も今はもう大学生や社会人。みんなステキな大人になって、それぞれの人生を歩んでいます。私が、今年ジュニアの会長になろうと決心したのは、まことに心外。可ばらしい仲間の事を1人でも多くの人に教えてあげたい、そう思ったからでしょうね。一緒に笑ったり泣いたり怒ったり、そんな仲間ってステキですよ。これからジュニアを背負っていく君達、ジュニアで本当に信頼できる友達(先輩、後輩)が、みつけられたら、その人は、きっと幸せな人だと思おうだけじゃない。人との出会い大切にしようね！

てはあけて、このジュニアのステキな思い出が、一杯つままっている四季も大切にしてください。

- 1 -

趣味といった目前の課題を語り合うだけでなく、生涯の友達づくりの機会にもなっているようである。彼(女)等は、子供会・老人クラブなどからの求めを受けて、レクリエーションリーダーの奉仕などのボランティア活動もしている。

④ 青年前期(高校二年生)大学生・専門学校生、社会人)

少年後期にこのような学習を体験した若者た

ちは、より主体的に集まって友情を深めたり、交流し合うようになる。

この時期の学習機会として青年教室を開き、彼等の意思を教育的に育てることにしている。年長の者は、既に親になっている者もいて、後輩の若者たちに進学、留学、下宿生活、就職、職業生活、恋愛、結婚、出産、育児などの体験を伝え、家庭を開放して学習の場を提供してきている者もいる。また、子育てを学ぶ家庭教育

表一 2 学習領域別学習者数

領域	グループ数	参加人数	(成人教育)
			運営委員数
家庭教育	5	289	61
生きがい	6	346	53
文学	5	213	25
歴史	6	245	63
自然科学	2	92	18
文庫活動	44	1,491	441
音楽	11	177	92
趣味	3	57	13
体育・スポーツ	(教室) 9	274	25
児童文化	11	193	54
消費生活	1	60	8
地域活動	8	101	15
合計	111	3,538	868

昭和62年度港南区学習グループ研究会研究資料から

昭和六十三年九月、総理府が二十歳以上の人を対象に行った「生涯学習に関する世論調査」の中で「一生を通じていつでも、仕事や日常生活に必要なことを学んだり、スポーツ芸術文化に親しみたりと思うか」との問いに、七八%

昭和六十二年港南区内で成人の学習に使われた経費は総額一千二百七十五万円に達している。内訳は、公費で援助したものは二百十二万四千円、学習者が負担したものは一千六十二万

別に見ると、表一3のように社会変化を反映した学習課題に取り組みものや、新しい学習方法を取り入れたものが増えて来た。女性学、高齢化社会の到来を学ぶものや放送利用学習などである。

の人が「そう思う」と答え、また、学習活動をしていない理由(阻害要件)の中に「費用がかかる」という回答が一四%あったが、本当の豊かさを感じる学習の広がりと共に、自分が自由に使える時間と金をどう持つか、ライフスタイルの決め手になって来ている。

三 暮らしの中にある学習エネルギー

育学級の受講生の中に、その若い母親の姿を見つけたこともある。

⑤ 成人期

社会教育事業の中心となる分野である。前に述べた家庭教育学級や、母親クラブの学習活動には、親として子育てを学ぶという目的があるが、本来成人期の学習として考えるべきものであろう。

この外に市民が自ら発見した課題解決のための学習活動がたくさんある(表一2)。

昭和五十年代になるとますます社会変化の加速が進み、余暇の増大、価値観の多様化など

が、市民の学習意欲を刺激し集団学習への参加が増え、集団学習運営のためのオビニオンリーダーの研修効果や、集団学習体験者の増加が、市民生活の中に潜在していた学習課題を顕在化し易くした。マスメディアの発達、都市化、情報化、国際化、高齢化、核家族化、中流化、生活様式の変化などの課題を茶の間に運んでくれた。

昭和六十二年港南区内に生涯教育学級が十二学級開設されたが、学習領域(方法・目的)

表一 3 昭和62年度生涯教育学級開設状況

学習領域(方法・目的)	学級数
自然科学を学ぶもの	1
女性学を学ぶもの	3
芸術を学ぶもの	1
歴史を学ぶもの	2
生活技術を学ぶもの	2
高齢化社会を学ぶもの	1
地域社会の教育機能づくりを学ぶもの	1
テレビの放送を利用して学ぶもの	1

開設地域別	学級数
自治会・町内会の区域に開設したもの	2
連合自治会・町内会の区域に開設したもの	3
目的集団として区内全域から参加したもの	6
区外・市外を含む広域から参加したもの	1

六千円もあった。また、全額自費で学んだグループが十六グループあり、三百六十五万七千円負担している（昭和六十二年度港南区学習グループ研究会資料）。

市民が暮らしの中で生活の一部として、学ぶということを実践するためには、学習に対する価値意識と、経済的な価値観とが一致すると、具体的な行動になることがうかがえる。

また、昭和六十一年度、港南区内の自治会・町内会や連合町内会で、生涯学習事業を実施したものが百五団体あり、その事業費は実に六千六百四十一万三千九百五十七円にも達している（住民組織の現状と活動 昭和六十二年度自治会町内会実態調査報告書 市民局市民課）。

これは生涯学習社会形式の貴重な活力であり、今後まだまだ変化の進む中でこのエネルギーをどう活用するかは市民・行政共通の課題と言えよう。

四——生涯学習社会を作る人たち

昭和六十二年度港南区内で行われた成人の学習活動で、社会教育行政が把握出来たものが百十余グループあったが（表12）、これらの学習者集団はすべて優れたリーダーシップを備えた代表者と、それに協力する運営委員から成り

立っている。港南区の学習社会づくりはこの人々を中心になって進められている。彼（女）等は、元来自らの学習のために参加したのであるが、学習者集団運営に欠かせないボランティアリーダーを自発的に引き受けた人たちである。聞いてみると様々な生活体験を持った人たちである。この人たちに生涯学習の理念や、魅力ある学習プログラム作り、集団学習運営、学習方法などを学んでもらい、教育機能を豊かにしていくことは、生涯学習社会形成に重要な戦略である。

港南区では、毎年これらの運営委員に市教育委員会社会教育課、婦人会館が開設する指導者養成事業の情報を提供し、受講を奨励している。参加者は学んだことをそれぞれの帰属集団に還元し、運営機能と学習効果を高めている。知識や技術の習得とその演習がうまく機能し合うように工夫している。

更にその運営委員会の効率を高めるために、研究と活動体験交流の機会を提供している。母親クラブ研修会、地域文庫研究会、学習グループ研究会などである。ここで語られる学習体験は、そのまま生きた学習情報として多くの人々に伝えられるので、貴重な情報収集と拡散の機会である。また、教育や文化について価値観を同じくする人との出会いをつくり、学習の

ネットワークも生まれて来る。

五——社会教育主事の生涯学習

私は社会教育主事を務めている間に、どれだけ多くの人たちと出会ったろう。いろいろな人格、価値観と出会い様々なことを学んだ。学ぶことの意義をこの人たちから学んだように思われてならない。そんな自己変革を楽しみながら仕事をして来られたのは、職業冥利に尽きるというものではないだろうか。加えて公務としての研修機会もたくさんあった（表11）。

これは私自身の生涯学習の一部であったし、学び得たことは市民（学習者）のために役立つものでなければならぬ。社会教育主事の専門性はこのような意識と学習の中で培って来た。

六——社会教育と生涯学習

Lifelong education という教育観が、一九六七年（昭和四十二年）パリで開かれたユネスコの国際シンポジウムで評価され、「生涯教育」と訳されて日本の教育界にも紹介された。

昭和四十六年の中央教育審議会の答申は、「生涯教育の観点から教育体系の再編成が必要である」と述べ、これを明治初期と第二次大戦

後の教育改革に次ぐ、第三の教育改革だと言っている。

更に昭和五十六年の中央教育審議会の答申では、「生涯教育とは、国民の一人一人が充実した人生をおくることを目指して生涯にわたって行う学習を助けるために、教育制度全体がその上に打ち立てるべき基本的理念」であるとし、その営みを生涯教育と呼ぶのがふさわしい、とも述べている。

社会教育と生涯教育そして生涯学習、これらの言葉はその概念をはっきりさせないまま急にマスメディアが多用するようになったため、混同され社会教育行政に携わる者の中にすら混乱もあり、学習が必要である。

いずれにしても社会・経済の急激な変化の中で区民の教育的、文化的要求は増大し、学習欲の多様化も進んでいる。そしてこの先学習の生活化や、生涯学習社会形式の意欲はますます高まって来るであろう。当然生涯学習社会形成の条件整備者である行政に対する市民の期待も高まって来る。

従前行って来た施策の見直し改善と共に、各局、区がバラバラに行って来た施策を、生涯学習という視点で総合化する必要がある。

その中で市民（学習者）との接触の最も多い社会教育主事の使命は、

- ① 生涯学習意識の醸成
- ② 多様な学習機会の提供

③ 集団学習運営のためのボランティアリーダーの発掘と養成

④ 継続学習の意欲と課題発見指導

⑤ 学習情報の収集・整理・提供

⑥ 学習する市民の求めに応じた指導・助言等であるが、これらの職責を果たすためには自らの資質・能力を高める努力しかない。

言い換えれば、自らの職業生活、家庭生活、社会生活の中にある生涯学習課題をどう発見し、学習して行くか、ということではないだろうか。確かな教育観と職業観を持たない者に市民（学習者）は何も期待しないであろう。

〈港南区市民課社会教育主事〉